

遊戯王ARC—V 月の光に嘘を隠して

月城遊羽

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

遊戯王ARC-V二次創作小説。

次元戦争も終わりを迎え、4つの次元には平和が戻った。

悪魔のデュエリスト「ズアーク」も消滅し、遊矢たち4人と柚子たち4人も元に戻った。

平和に包まれた世界の中で、彼らはそれぞれの想いを胸に秘める。少しずつ変わっていく人間関係。そんな後日談の中で交錯する少年少女の話。

気持ちを隠すために他人を利用し自虐する者

利用されていることを知りながらなお共に居ることを望む者

一人の幸せを願い自分を犠牲にする者

諦めようとする者

影から密かに想いを強める者

ただただ見守る者

全ての人間がハッピーエンドを迎えられる世界なんてものはどこにも存在しない

でも、せめて彼には、彼女には、幸せになってもらいたいから――

だから、嘘を、隠さなきゃ。

※アニメ完結して遊矢の中に3人がいるような形になってしまいましたが書き始めたのが放送中だったので4人に分裂したという特殊設定でこのまま行きます。

※最初のほうにボーイズラブ、R-15要素があります。苦手な方はそこを飛ばして読むか、ブラウザバック推奨です。(CPはデニス×ユーリ、ユーリ×遊矢、素良×遊矢です)

目次

偽物

A c t. 5	A c t. 4	A c t. 3	A c t. 2	1	A c t. 0
A l r e a d y	T r u t h	L i a r	J u s t m e		P r o l o g u e, A c t. 1
					P a r t n e r
18	13	9	4		

偽物

Act. 0 Prologue, Act. 1 Par
tner

【ACT. 0 Prologue】

寂しげに――。

ただ寂しげに、その音は響き渡る。

今にも泣き出しそうな、そんな音の粒たち。

美しい音色で心を癒す…そんな曲のはずなのに、

彼が奏でるこの曲は…このピアノは…

なぜこんなにも悲しそうな音色を出すのだろう。

なぜこんなにも胸が締め付けられるのだろう。

漆黒のピアノが、

対照的な真っ白の鍵盤が、

その上に優しくのせられた白い指が、

窓から差し込む月明かりに照らされる。

指がゆっくりと鍵盤から離れ、音が止む。

演奏を終えた彼は、そのまま声を発することも無く、

ただ、月の光を眺める。

寂しげに。

ただ、寂しげに。

【Act. 1 Partner^{相方}】

青白い光が、すやすやと眠りにつく少年の顔を、白い肌を、淡く照らし出す。艶やかな紫色の髪が、光をうけて仄淡く煌く。まだ幼さを残すその顔は、起きている時の冷淡さからは想像もつかない。しかしそれは同時に、彼がまだ十五にも満たない子供であることを思い出させる。

彼はとても冷酷な人物だった。なにより人をカードにすることを楽しんでいた。欲していた。彼は周りから恐れられた。敵からも、味方からも。しかし彼はそんなことはどうでもよかった。彼はとても強く、また、強いもの。自分が楽しめる物にしか興味がなかったのだ。彼が泣いたり、声を荒げて怒ることはあまり無かった。ただ冷徹に、冷やかに、他人を煽り、嘲り、自分の欲望のままに生きる。彼はそういう人だった。

しかし…次元戦争も終わり、いつぶりかという平和が訪れた今、少

年は泣いていた。すやすやと眠る少年の頬には、一筋、涙が伝っていた。

少年の傍らには、彼の髪を愛おしそうに撫でるオレンジ色の髪をした青年の姿があった。涙に気がつくのと、そつと指でその雫を拭う。そして、彼を見つめながら、再び大切そうに撫でる。愛おしそうに、しかし寂しそうに、悲しそうに。青年は、少年の仕事仲間であり、少年が「仲間」、と認める数少ない人物だった。青年は……デニスは、少年の頬にかかる髪を優しく払うと、ぽつりと呟いた。

「愛してるよ、ユーリ……」

二人が同じベッドで寝るようになったのは……つまりそういう関係になったのは、いつからだっただろう。戦争が終わる前だっただろうか……後だっただろうか……。しかし、二人は恋人というわけではない。なぜなら、少年は……ユーリは、デニスに好意を寄せているわけではないからだ。

それならば、なんと表わすべきなのだろうか。愛人？セフレ？どちらかといえれば後者か……。ユーリはそう思っていたかもしれない。だが、少なくともデニスはユーリのことを本気で愛していた。ユーリはそれを受け入れたにすぎない。

しかし……デニスは知っていた。ユーリにはもう一人、似た関係の相手がいることを。ユーリ自身に聞いたからだ。そして、ユーリがその人物のことを愛しているわけでもないことを。そして気付いていた。

——彼が本当に愛している人物がいることに。

Act. 2 Just me

Act. 2 俺だけ Just me…

ユーリはこの夜、デニスの部屋ではなく自室に居た。一人部屋にしては広すぎる部屋と、広すぎるベッド。そして、そのベッドでは、幸せそうな顔をして眠る、ユーリとよく似た顔立ちの少年がいた。赤と緑の二色に分かれた髪に、あどけない寝顔を浮かべている。

彼——榊遊矢もまた、ユーリに好意を寄せていた。遊矢は、元はユーリとは敵同士だった。しかも、過去に遊矢の幼馴染を拉致しようとし、あげく父親をカードにしたのはユーリだったのだ。なぜ好意を持つようになったのか…それは本人もわかっていないかもしれない。そしてきつかけは至極日常的なもので…ユーリはまさか遊矢とこんな関係になるとは思ってもいなかった。

それは、突然大雨が降り始めた日だった。ユーリはアカデミアの中庭に面した廊下をぼんやりとしながら歩いていた。無数の雨が窓を叩きつける。ふと、ユーリが中庭を見やると、虚ろな目で見上げ雨の中に佇む遊矢の姿が目に入った。普段なら気付かなかったふりをして立ち去るところだった。しかし、どれだけ経っても遊矢は身動き一つしない。

「ちよつと、そんなところで何してるのさ、遊矢。風邪引くよ。」

不審に思い、そう声をかける。しかし、遊矢は静止したまま、その体到大粒の雨を受け続ける。しびれを切らし、苛立ちながら降り注ぐ

雨に身を投じようとしたその時だった——突如、遊矢の体がぐらりと傾き…そのまま草の生い茂る花壇に倒れこんだ。慌てて駆け寄ると、どのくらいの間そこにいたのかというほど、体が冷え切っていた。

急いで自室に運ぶと、そこでようやく遊矢は目を覚ました。

「あ…れ、ユーリ…う…ここ、は…。」

ぼーっと覚醒しきっていない目できよろきよると部屋を見回すと、突然頭を抱え軽く苦痛の声を上げた。

「ここは僕の部屋。君、雨の中突っ立っててそのまま気を失ったんだよ。僕の目の前でね。仕方ないから、ここに運んで来たんだけど。で…頭痛いの？まあ、あれだけ濡れてたんだ。ほら…早くシャワーでも浴びて来なよ。置いてあるものは好きに使ってくれて構わないから。」

5

そして「本当に何してたのき…」とぶつぶつ文句を言いながら遊矢にタオルを渡そうとする。すると、いきなり遊矢が腕を強い力で引つ張った。予想外の出来事に、ユーリは抵抗することもできないまま、気がついたときには遊矢に押し倒されてしまっていた。

「……………は？…ねえ、なんの——」

つもり…と言いかけて、止める。ユーリの頬に、ぽつ、ぽつと水滴が落ちた。

「……………なんで泣いてるの。」

遊矢は泣いていた。両の目からは止めどなく涙が滴り落ちた。何に対して泣いているのか、ユーリにはまったくわからなかった。

次の瞬間だった。遊矢は、そのまま覆いかぶさってきた。そしてそのまま、二人の唇が触れ合う。ただ唇を重ねているだけなのに、遊矢はとても熱かった。雨で風邪をひいたんじゃないか……遊矢に身をまかせながら、ユーリはそんなことを考えていた。ユーリが抵抗しないことを悟ると、遊矢はさらに攻めた。するりと舌を滑り込ませ、そのまま濃く、深く、自分という存在を刻み込んでいくように攻め立てる。普段の彼が見せないような、貪欲な獣の姿だ。それほど時間がたっているわけではないのに、二人にとってその時間はとても長く感じられた。

ようやくユーリを解放した遊矢は、自分のしたことに気付くと顔を真っ赤に染めた。そして、再び泣き出しそうな顔をする。

「……ごめん。……ごめん、ユーリ……」

震えた声で、遊矢は言葉を紡いだ。そして、泣きながら、想いを吐き出した。

その日から、遊矢はもう一人の恋人偽恋人となった。遊矢の気持ちを、受け入れたのだった。そしてそのことを包み隠さずデニスに伝えた。デニスは、それでもいいと言って今の関係が続けることを選んだ。遊矢にはデニスのことを話さなかった。というより、話せなかった。遊矢が自分にとっても執着していることに気付いたからだ。もし話せば：デニスの身に危険が及ぶようなことがあるかもしれない、遊矢が自分自身を犠牲にするかもしれない。それらはその時のユーリにとつて、恐怖だった。話さなければいつか遊矢が傷つくであろうことを知っていても：それでもユーリは言えなかった。

遊矢は、みんなに笑顔をと、エンタメデュエリストを目指す半面、まるで揺れる振り子のように精神面に弱さがあった。それはユーリとの関係の中では顕著に現れた。なにより、独りになることを恐れた。そして、日が増すほどに、遊矢はユーリに執着するようになった。しかし、ある一定のラインで必ず身を引いていた。ときどき、ユーリが一人で寂しそうな顔をしていたり、眠っているときに涙を流したりしていることを、遊矢は知っていた。そしてユーリがこういうことに慣れていることも気付いていた。それ故に、不安に包まれることも何度もあった。今は、「ユーリが傍にいてくれるならどうでもいい」と思っていた。なにも考えないようにしよう、と。それでも、遊矢は幸せだった。

もっとも、その幸せが長続きするなどということとは、万に一つもありはしなかったのだが。

Act. 3 Liar

Act. 3 嘘吐き Liar

ユーリに罪悪感がないわけではなかった。少し前なら罪悪感など全く感じなかっただろう。しかし、他人と関わり、接することによって彼は少しずつ変わっていった。そう……誰かを想えるほどに。気遣えるほどに。そしてそれは次第に、ユーリを苦しめていった。心の内に秘める想いと、罪悪感で、ユーリは潰されそうになっていた。

月明かりの零れる、いつもの場所。今日もピアノの音が響く。柔らかく幻想的な音が部屋中を包み込む。次第に和音を増やし次々と重なっていくと、それに呼応するかのように指の動きも速くなり、言葉にできない叫びを、感情を内包したかのように高く高く連なっていく。そして一瞬の静寂の後——……。流れるような旋律と共に指が滑らかに白い鍵盤を滑る。一つ一つの響きが美しく、優しい。いつもの曲だ。そう……いつもの、寂しげな、曲。その指で奏でられたこの曲に込められているのは、自責の念なのかもしれない。あるいは、吐き出すことのできない秘めたる思いだろうか……ユーリは、鍵盤を叩きながらいつも同じことを考えていた。

僕は、僕の生きたいように生きてきた。立ちふさがるもの、邪魔するものは全て排除してきた。僕が最強であることを証明したい……打ち負かしたい……そう思っていた。「全ての次元の人をカードにする」……そんな夢すら持つほどに。

いつからだっただろう、こんな風に少しでも人のことを気にして悩むようになったのは。デニスが突然音信不通になって後にカードに

なったことを聞いた時だっただろうか。

遊矢や遊矢の仲間たちと「友達」として接するようになって、僕の中で「他人に対する認識」というものが変わったとは自分でも思う。他者を打ち負かしたり、僕の強さを見せつけるのは好きだ。敗者がカードになるのはあたりまえじゃないかと思っていた。でも、遊矢たちに教えられた。負けても、またいつか挑戦して勝てればいいじゃないかと。あのとき遊矢に負けて、僕は初めて敗北を味わった。そして、幾許かの悔しさと、それでも負けたのが遊矢で良かった、という気持ちに包まれながら僕は遊矢に：ズアークに吸収された。こうしてまた4人に戻って、皆とまたデュエルをした今なら、遊矢たちの言うことも理解はできるし納得もしている。それに僕自身、勝ちたいから、楽しみたいからデュエルをしている。それは彼らも同じで、特に悩む必要もなかった。

あれから少しの歳月が経って、その間に遊矢ともあんな関係になって、色々なことが変わっているはずなのに何も変わっていないような：そんな日々が続いている。でも、僕は：僕は、違うんだ。僕が本当に手に入れたいものは手には入らない。そして遊矢やデニスの気持ちも裏切るようなことしかできない。僕は嘘吐きで、僕の放つ「愛している」だとかそんな言葉には何の意味も無くて。ただ自分に与える免罪符のようなもので、「愛している」と言葉にして伝えることで彼らは喜ぶでしょ？」と発している無意味で卑劣で思いやりのかけらもない言葉だ。いつか彼らを傷つけることになるだろう。特に遊矢は：。

どうすれば良かったのか、なんて今言い出しても手遅れなことは明確で、これからどうすることが正解なのかなんてことは僕にはもうわからない。だからせめて遊矢とデニスとこの関係を続けていこう：僕の欲しいものの代わりに。デニスと遊矢が僕を求める限り。僕の

本当に欲しいものが手に入らない限り。この曲も…代わり、だ。

細かい音の粒がピアノから零れ落ちる。小さく…確かに響き渡る音色が部屋を埋め尽くし、外に漏れる。夜の闇の中、淡く照らし出されるピアノと彼は、幻想的な美しさを醸し出している。やがて終盤に差し掛かりだんだんとその音は小さくなっていく。

———最後の音。

指が鍵盤から離れ、膝の上に乗せられる。暫くの静寂。ピアノの音が止んだこの場所には、月の光と、無音で佇むピアノと、ずらりと並ぶ白鍵と黒鍵を意味もなく見つめる少年以外には何も無い。椅子を軋ませ立ち上がると、そのまま開放されていた窓に歩み寄る。ここはアカデミアの中でも端に位置する立地ゆえに、夜中に窓を開け放ちピアノを弾いてもアカデミアやその寮にいる者たちには聞こえない。夜が更けるとここに通いピアノを弾いては意味もなく窓の外を見やる。それがユーリの日常になっていた。

「僕が本当に欲しいのは……」

薄く開いた口からそんな言葉がポロリと漏れ出す。

その言葉が彼自身の耳に入るや否や、自分の発した言葉に自虐的な笑みを浮かべ、鍵盤の蓋を閉める。支えを外して本体の蓋も閉めると、再び窓に近づく。静かにぱたりと窓を閉め、ユーリは靴音を廊下に響かせながらその空間を後にした。

「ほーんと、不器用だよね。ユーリは。可愛いなあ…本当に愛おしいよ。早く幸せになっちゃえばいいのに。」

そう呟いた影はオレンジ色の髪を揺らしながらそのまま姿を消した。

Act. 4 Truth

Act. 4 Truth^{真実}

ある日…まだ日差しが明るい、そんな日中。素良と柚子は修造塾の近くにある河原で並んで座っていた。

「ねえ、柚子。」

「何？」

「柚子って、遊矢のこと、好きなの？」

唐突にそう問いかけてくる素良に柚子は慌てふためく。

「な…、…そりゃあ、友達だし…好きだけど…。」

「じゃなくて、僕が聞きたいのはさ、恋愛感情があるかどうか、ってこと！」

そんなの言わなくてもわかるでしょ、と言うかのように顔をむくれさせる素良に、顔を赤くしながら柚子がまごまごと口を動かす。

「え、いや、その…えっと…。」

煮え切らない態度に、溜息を一つつくと、素良は柚子に向かって言い放つ。

「そんなにノロノロしてるんだったら、さっさと僕が遊矢を貰っちゃうけど。いいよね？」

一瞬の沈黙——素良の放った言葉を柚子が理解すると同時に、彼女は反射的に叫んでいた。

「——それはだめ!!!」

「ほら、やっぱり遊矢のこと好きなんじゃん。」

「…っ—」

頬を染める柚子に、「まあ…」と素良は続ける。

「まあ、僕が遊矢のことをそういう対象に見てることは変わらないから、柚子にとって恋敵ってことには変わらないんだけどね。ああ、あと、あいつも…。」

素良が遊矢に恋愛感情を持っていることを柚子は知っていた。しかし、他にもいたなどということは知らなかった。遊矢を好いているのは私たち以外には一人だけ——ミエルも遊矢のことを好いているが、素良がミエルのことを「あいつ」などと呼ばないことは明白だ。

「あいつ…? 遊矢を好きな人がまだいるってこと?？」

その問いに、少し困ったように、迷っているように素良が眉根を寄せる。躊躇うかのように黙り込むと、少しして意を決したように口を開いた。

「あ—…えっと、ね。…あいつ、っていうのはね、柚子…。…ユ—リのことさ。」

「え…ユーリ?…:…:ユーリって、遊矢のことが好きだったの!？」

「遊矢は今、ユーリと付き合ってるらしいから。遊矢はユーリのこと本気で好きみたいに見えたし、恋人同士がするようなこと、してたし。」

「遊矢が…ユーリと付き合っている…?？」

思考がフリーズする。柚子は暫く黙りこむと、「…そう、だったのね…私知らなかった…。」とか細く声を漏らす。

「…あいつには渡さない。あいつが本当に遊矢のこと好きかどうかとか知らないけど…僕は遊矢をあいつには渡したくない。」

素良はユーリが遊矢のことを深く愛しているとは思えなかった。遊矢がいつか彼に傷つけられる時が来るかもしれない…、そう、素良は懸念していた。どれくらいの間が過ぎていたのだろうか。考え込んでいると、柚子が心配そうな表情で顔を覗き込んでいた。

「素良…?大丈夫?？」

「だ、大丈夫だよ!」

とっさにそう告げると、柚子は「ちよつと怖い顔してたわよ?」と少し苦笑いを零し、

「それじゃあ、素良。私、そろそろ待ち合わせがあるから行かなくちゃ。」

そう言いながら立ち上がり、服についた草を払った。

「ああ、うん、了解つ。またね、柚子！」

そう言つて柚子と別れた後、素良は一人アカデミアに向かった。

「ちよつとユーリ！忘れ物だよ!!」

ふいに前方のデニスの部屋からそんな声が聞こえてくる。ちらりと目を向けると、部屋からちよつとユーリが出てきたところだった。「…何？」と返しながら部屋の中に戻るユーリから目を離し、そのままスタスタと部屋の前を通り過ぎようとする。

「……今日はどうするの？」

かすかにだが、確かに少し隙間を作り開いたままの扉の向こうから、ふとそんな声が聞こえてきて、ぴたりと素良の体が止まる。

「…そうだね。今夜は遊矢と一緒にかな。」

そう返すのは、まぎれもない、ユーリの声。奇妙なくらいに淡々と、落ち着き払い、デニスの言葉に応じている。

「明日はこっちに來るから。」

「ん。オーケー。」

素良の耳にその言葉が聞こえた瞬間、素良は反射的に部屋の前から立ち去っていた。今聞こえたことが、何を意味するのか。今夜は、明日は、と、彼らは確かにそう言った。今夜、ユーリは遊矢のところへ行く。明日は、デニスのもとに。つまり……。素良の感じていた不安は見事に的中していたわけだ。確信を得たところで、素良の中に激しい憤りと焦りが生まれる。心を、体を急かすように、足早にアカデミアを駆け抜ける。

「遊矢……っ！」

ただ一人、自分の愛する者を守るために。
その事実を伝えることが、たとえ彼を傷つけ悲しませることであっても。

Act. 5 Already

Act. 5 Already knew

「はあっ、はあっ…、遊矢…っ、遊矢っ!!!」

バンツと扉を押し開け彼の部屋遊矢に入る。するとその部屋の主は肩で息をする素良を見て、突然の来訪者に驚いたのか、うわあっ!?!と声を上げ振り向き目を見開いた。

「…びっ……くりしたあ。どうしたんだよ、素良。そんなに慌てて。」

「いや、あの、うん…、えっと…、」

息切れで上手く話せずに居ると、「とりあえず落ち着け」と水を渡される。

「ねえ、遊矢…。」

水を飲んで呼吸を落ち着かせると、今までの勢いはどこへやら、憤りを押し殺すように、抑えるように顔を俯かせ静かにぽつりと呟いた。

「なんだよ?」

きよとんとして遊矢が聞き返す。素良は少しばかり顔を上げて、続く言葉を紡いだ。

「遊矢は、ユーリと…その、付き合ってるんだよね…?」

知ってはいる。けれど、実際認めたくはない事だった。此処で違うという返事が返ってくるなら、あの事実も、伝える必要は無いだろう。質問の内容が意外だったのか、一瞬間を置いて遊矢が「ああ、そうだけど。」返す。少し顔を赤らめて。それを聞いて、少し胸に痛みを感じながら、意を決したように真っ直ぐに目を見据える。

「じゃあ、…ユーリが他の奴ともそういう関係になってるのは、知ってる?」

静かな声で、しかしはつきりと告げる。

遊矢が目を見開く。しかし半ば空いた口から音が漏れることは無い。

——そして長い、長い沈黙。長くはないのかもしれない。しかし、素良にとってはとても長く感じられるものだった。

当然、そうなるだろうと予感はしていた。ユーリと別れると言わないのは、それを言ったら遊矢がどうなるか、想像がついているからだ。人一倍繊細。そんな所も、素良は理解している。だから、言わないでも、これは、言わねばならない事だった。これ以上遊矢を傷つけさせるわけにはいかなかった。これ以上遊矢がユーリにのめり込む前に、自分がそれで嫌われることになっても、言わなければならぬ事だった。

「……………知って、る…よ。」

俯いたまま遊矢が呟く。素良は耳を疑い目を見開き、今しがた聞こえてきた言葉を頭の中で反芻させる。遊矢は、知っている、と言った。

知っている、と。つまり……

「遊矢、君は……知ってて、なんで、そんな……。」

理由は聞かずとも分かっていた。何故、「なんで」と聞いてしまったのか、自分でも分からなかった。

なんで、なんて決まっているじゃないか。自分も「恋」をしているのだから。好きな相手と一緒に居られるのなら、出来る限りのことをする……それは当然の行動だ。何故か。それは……

「……好き、だから。」

そう、好きだからだ。好きという気持ちは自分の辛さなんて吹き飛ばしてしまうくらいの幸福な時を与えてくれる。それは、一瞬のことでも、それまでの長い苦しみを凌駕するほど大きなものだから。

「ユーリに直接聞いたわけじゃないけど、何処か手慣れてたし、毎日一緒に居られるわけじゃなくて、今日は用事があるからって言ってる時が多かったから。だから相手が誰かとかは知らない。けど、いいんだ。俺はそれでもユーリのそばに居たいから、このことをユーリに伝えたりも、しない。」

わかってしまうから。その気持ちが痛いほどわかってしまうから。素良はそれ以上遊矢に聞いたことが出来なくなってしまうた。

「素良は……相手を知ってるのか？」

俯いているとふいにそう問いかけられて一瞬口ごもる。

「遊矢は……知りたいの？」

逆に聞き返す。そこで、少しだけ、遊矢の表情が硬くなった。

「…知りたいかと言われればそりゃ知りたいけど……正直聞くのは怖いなとも思う…かな。でも、きっとその人もユーリの本命じゃないんだろうけどさ。」

「ユーリの…本命？」

まさかの返答に驚いた表情を見せると、遊矢はふと窓の外、俯瞰の風景を眺める。

そして。

「だってさ、ユーリのやつ、寝てる時に泣いてたんだ。今俺みたいに相手してるやつがユーリの本命なら、泣いたりなんかしないはずだろ？」

どこか、別れを惜しむように、泣いてしまいそうな、今にも消えてしまいそうな表情で、彼は言った。